

山手線膝栗毛

目白はいつまでたっても清楚な深窓の令嬢の雰囲気を見失わない。
だが、私は目白を、空しく、通過するのである。

テニ万ルライター

小田嶋 隆



「ああ」
私は思った。
「キャンパスは、こうでなければいけない。どうして自分は、女の子が全然脚を洗っていない大学にはいつてしまったのだろう」
この「キャンパス内女子学生脚洗い事件」は、早稲田大学教育学部に、巨大な反響をもたらした。
「本当か、オダジマ」
「確かに見たのか？」
「ああ」
「洗っていたんだな」
「ああ、洗っていたとも。靴を脱いで、靴下を脱いで、脚を洗っていた。オレは見た」
早速、学習院脚洗い女子大生見学ツアーが組まれ、十数人の男子学生が、目白を目指した。嘘のような話だが、本当だ。日本の将来を背負って立つはずになっているエリートは、実はこの程度の人だったのだ。
目白に憧れるあまり、私は、英会話学校に入學する決意を固めたことがある。
「ロース英会話」という、目白の駅から三分ほどのところにあるその英会話スクールは、どちらかと言えば二流の学校だった「今はもうない」が、そんなことは関係がなかった。むしろ二流が狙いだった。なぜかといえば、私は
「一流の英会話スクールは、海外出張を控えた商社マンだとか、大学院生みたいなものが多くて、面白くないぞ」
「その点ロースなら、家事手伝いとか女子大一年だとかのアーバーなねえちゃんばかりで、そりゃあもう、酒池肉林よ」
という情報を、事前に入手していたからだ。
早速、パンフを手に入れ、入學金を用意した。が、結局、入學するところまでは行かなかった。入學金を飲んでしまったからだ。私は、いつも大切な金を飲んでしまう。大切でない金も、考えてみれば、やはり飲んでしまっているのだから、大切な金を飲んでしまった後の苦い後味は、なかなか消えないものである。
今でもその時のことを思い出すと、つくづく惜しいことをしたと思う。あの時、入學金を飲んで

東京には、目白不動尊、目黒不動尊、目赤不動尊、目青不動尊、目黄不動尊という、五つの不動尊がある。江戸の町に住む人々は、古来、それらを総称して「五不動」と呼んでいた。意外に知られていないことだが、目白の町の名は、その五不動のうちの一つ、目白不動に由来している。
など、いきなり土地の古めかしい話を始めてしまつて恐縮であるが、町の名前というのは、案外馬鹿にならない。池袋がいかに「イケブクロ」といった感じ「行けども行けども袋小路の堂々巡り」の町であるように、目白もまた、その名の通りの町なのだ。
なにより「白」という清楚な一文字を含んでいるところが目白らしい。その「白」は、たぶん、この町に集まる女学生たちの歯の白さであり、うなじの白さであり、ふくらはぎの白さだ。そう、目白の駅を通る時、私の目は、いつでもジロ目になった。今から十年ちよつと前。当時、私は高田馬場にある一流大学「もつとも、この大学の学生は、エリートでないふりをしたがるのであるが」に通っていた。その間、私は毎日目白の駅を空しく通過していた。ただ通過したのではない。為すべしなく、指をくわえて、満たされぬ思いで、空しく通過したのだ。
池袋から山手線に乗り替えて、高田馬場まで行く間、車両の中にある小さい女の子は、みんな目白で降りてしまった。実際、目白を通過した後の車両の殺伐さは、見事なほどだった。その前が華やかだっただけに、目白を過ぎた後の車両は、まるで桜が散った後の上野の山みたいに、にわかにながれ、汚れた食ってきた課長補佐、戸山の公園前に職探しに行く土工・汗臭さと暑苦しさ、

しまつていなければ、私の人生は、ずいぶん違った展開をしたと思う。酒池の方はともかく、ついに肉林を経験することなく三十を過ぎてしまったのは、実になんというのか、返す返すも残念なことだ。
未練だらしい話はやめよう。
それにしても、目白は、池袋と高田馬場に挟まれていながら、その両方の町と、まるで違っている。この、小さい、健気な町は、両隣から吹きつけてくる蛮風に毒されることなく、あくまでも清楚としたたたずまいを維持しているのだ。偉い、と思う。なかなかできないことだと思う。
仮に、池袋、高田馬場、目白の三つの町を三姉妹と仮定してみると、長女の池袋は運つ葉なやぐざの情婦、次女の高田馬場は小生意気なスケ番ぐらゐの位置づけになる。二人とも、年齢を重ねるにつれて、化粧が濃くなり、言葉つきや仕事も日を追ってぞんざいになってきている。
しかし、三女の目白だけは、いくつになっても清楚な深窓の令嬢の風情を見失わない。リア王の三人の娘たちの場合もそうだったが、末の娘だけは、まるで別の血が流れているみたいに、心優しいのである。
駅前にはソープはおろかピンサロも雀荘もなく、サラ金や養老の瀧もない。町を歩く人々に落ち着いた足取りで歩いている。
と、延々と目白賛美を並べ立ててきたが、実のところ、私はこの町が好きなのではない。むしろ、嫌いと言っても良い。小さいのは結構だが、面白味に欠けると思っている。目白には、おいしいケーキ屋さんがいくつもあつたのだぞうだが、そんなことは私にはどうでも良いことだ。
結局、ある種のトカゲが砂漠にしか住めず、ある種の魚が清流を嫌うように、人間の中にも、いわゆる「良い環境」になじまない人々がいるということなのだろう。
そんなわけで、目白は、いまだに、私にとって縁遠い町だ。いや、パソコン業界に身をおくようになって七年。私は、ますます目白にふさわしくない男になつていく。
長雨や、目白は遠くなりにつれて、である。

急に十倍にふくれ上がった、私は、吐きそうになつた。
目白は、そんなわけで、私にとって、大いなる憧れの町だった。ここには、学習院大学があり、川村女子学園があり、日本女子大があり、そのほかに女の子向けの専門学校や語学スクールがいくつもあつたからだ。
くだらない憧れだと思ふ人もあるだろう。そういう奴は笑えば良い。憧れは、他人の目から見れば、いつだってくだらないものだ。
私たち「くさくさした気分の早稲田大学の男子生徒たち」は、時々、用もないのに学習院大学に出かけた。学習院のキャンパスは、深い緑に囲まれた、まさに「キャンパス」と呼ぶにふさわしいところだった。緑の中にはベンチが置かれ、ベンチには学生たちが思い思いに腰掛けていた。そしてそのベンチの上の学生たちは、なごやかに談笑していた。
談笑。
屋下りのキャンパスで、若い男女が、おだやかな表情を浮かべて談笑をしているのである。私は、そんなことは、生まれてこのかた、一遍だってしたことがなかった。少なくとも、早稲田では、談笑は不可能だった。早稲田の構内は、誰も彼もがわめいていて、しかも誰も聞いていない場所だった。その点、学習院は、まことにのんびりしていた。学内は静かで、空気まで心なしか澄んでいる感じがした。ベンチに座っていると、遠くの方で、
「ポーン」
というテニスの打球音が聞こえてくる。そしてテニスコートの近くにある水飲み場では、短いテニスのスコートをはいた女子大生が、脚を洗っている。

目白